

社会関係資本と図書館・情報サービス——地域・社会とのつながり力

特集

信州大学附属図書館における
地域連携

◆図書館の多様な連携のあり方

折井 匡／小島 浩子／郷原 正好

1 はじめに

国立大学は、教育・研究・社会貢献を基本方針として掲げ、社会や地域連携を担う組織として、公共性の観点から社会に対して開かれた大学であることが求められている。

信州大学では「理念・目標」¹⁾において、長野県を拠点とした地域への活動を「信州の自然環境の保全、歴史と文化・伝統の継承・発展、人々の教育・福祉の向上と産業発展の具体的課題に貢献するため、大学を人々に開放し関連各界との緊密な連携・協力を進めます。」としている。日本経済新聞社・産業地域研究所が全国にある731の大学を対象とした調査「全国大学の地域貢献度ランキング2011」²⁾では、信州大学は総合2位となった。2009年度の23位、2010年度の6位から順位を上げたことは、県内5キャンパスが地域連携に積極的に取り組んだ結果であるといえる。

信州大学附属図書館（以下「附属図書館」）での地域への取り組みは、公共図書館との連携に留まらず、専門領域（医学系）、学術的連携（学術成果の発信）、文化的連携といった多様な活動で

ある。このような図書館での地域連携の意義と、その役割と効果について考察する。

2 公共図書館との地域連携

2.1 附属図書館中央図書館

附属図書館は、図1で示すように中央図書館と5学部の学部図書館（県内5キャンパス）で構成している。

2010年には、信州大学の理念目標に沿って附属図書館の「理念・目標」³⁾の見直しを行ない、六つの目標を策定した。その一つは知の提供（地域貢献）であり「地域文化の振興のため、地域社会との連携を積極的に推進し、地域に根ざした図書館を目指します。」として地域連携を明確に掲げた取り組みであった。

2010年7月には、附属図書館と松本市・塩尻市・安曇野市の図書館（以下「市図書館」）との連携協定を締結した⁴⁾。附属図書館が所蔵している123万冊（当時）の資料と松本市（100万冊）、塩尻市（40万冊）、安曇野市（30万冊）の持つ資料を300万冊の資料が相互利用によって手軽に利用できるようになったのである。実質的には、附属図書館中央図書館（以下「中央図書館」）の「OPACでの相互リンク」「貸出資料の返却サービス」「相互貸借」「共催イベント・職員研修」である。

この中で特徴的なサービスは「貸出資料の返却」であり、これによって資料返却の利便性が大

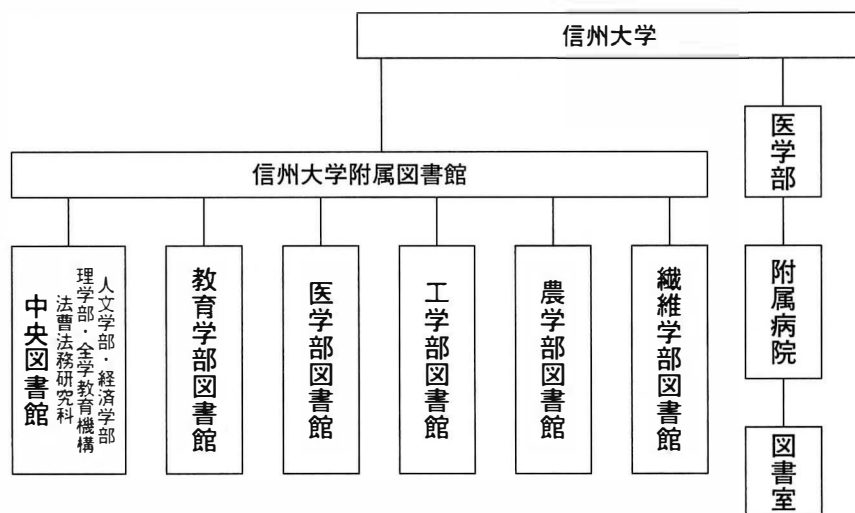
おりい ただし：信州大学附属図書館中央図書館

こじま ひろこ：信州大学附属図書館中央図書館

ごうはら まさよし：信州大学附属図書館

キーワード：地域連携、大学図書館、公共図書館、患者図書室、医学文献複写サービス、Jdream II コンソーシアム、患者図書室、信州共同リポジトリ、遺跡資料リポジトリ、アメリカンシェルフプロジェクト

図1 信州大学附属図書館組織図



きく向上したことがあげられる。信州大学の学生・教職員は、市図書館から借りた資料を中央図書館へ返却することが可能となり、また市民は、その逆の返却ができるようになった。当面は中央図書館間での返却となるが、これにより専門書は大学図書館を利用、小説などは市図書館を利用するといった、大学図書館と公共図書館が不得意である資料の利便性が向上し、学生からの小説類が少ないといった要望にはこの連携を活用することで解決することができた。

貸借・返却の状況を2010年度と2011年12月までの状況を表1に示した。、顕著な効果は表れていないものの、このサービスが定着しつつある状況にあるといえよう。

市図書館との共催イベントは、附属図書館および附属図書館との連携関係にある名古屋アメリカンセンターからの講師派遣⁵⁾により2010年度か

ら3回開催している。

なお、附属図書館は地域への開放として一般市民の利用も可能となっている。2010年度の学外からの利用は3,378名であり、図書の貸出は1,600冊であったことから、大学での広報の限界があり、このサービスがまだ市民に浸透しているとはいえない状況であるといえよう。

2.2 附属図書館農学部図書館

附属図書館農学部図書館は、附属図書館の6図書館の中では一番早く、2008年に伊那市と連携協定を結んでいる。主な連携内容は、相互貸借、OPACの相互リンク、環境図書展の共同企画であったが、2011年4月の再協定により附属図書館と同様の内容に変更して連携の充実を図った。その結果、表2で示すように市への返却が144冊となり、学生の利便性が向上してきたといえる。

表1 中央図書館一貸借・返却

	貸借受付		貸借依頼		市から返却		市へ返却	
	2010年度	2011年度	2010年度	2011年度	2010年度	2011年度	2010年度	2011年度
松本市	9	8	5	8	44	40	1,649	656
安曇野市	49	60	0	0	8	8	0	24
塩尻市	0	4	1	2	16	13	31	7
計	58	72	6	10	68	61	1,680	687

※2011年度：4月～12月

表2 農学部図書館一貸借・返却

	貸借受付				貸借依頼				市へ返却	市から返却
	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2011年度	2011年度
伊那市	11	6	3	0	10	23	4	10	144	0

※2011年度：4月～12月

3 専門領域（医学系）での地域連携

3.1 附属図書館医学部図書館

附属図書館医学部図書館（以下「医学部図書館」）では、地域の病院関係者の要望で2008年6月より新たに「JDreamⅡのコンソーシアム契約」による特別価格の提供（以下「JDreamⅡコンソーシアム」）と「Web申し込み方式による文献複写物の提供」（以下「医学関係文献複写サービス」）と二つの学術情報サービスを長野県内の信州大学研修医・研修生派遣病院（以下「関連病院」）に開始した。

JDreamⅡは、科学技術振興機構（以下「JST」）が提供している検索システムであり、日本国内発行の資料から医学、薬学、歯科学、看護学、生物科学、獣医学等に関する文献情報を収録したJMEDPlusや、米国国立医学図書館が作成・提供する医学およびその関連領域を収録したMEDLINEなどを提供するサービスである。医学関係文献複写サービスは、医学部図書館へWeb申し込み方式で依頼された文献を、自館所蔵の有無にかかわらず提供するサービスである。

これらの新サービスにより、文献検索が病院図書室でも可能となり、必要とする文献は医学部図書館へ依頼すれば入手できるシステムが確立した。結果、医療現場のニーズを的確に捉え病院からの複写依頼が飛躍的に向上することができたの

である。

(1) 長野県内病院との関係

長野県内の地域中核病院図書室と医科系大学図書館の職員が中心となって、医療情報の充実・向上と医療情報活動を通じた地域医療の発展に献身することを目的として、2005年12月に「長野県医学図書ネットワーク」（以下「医学図書NW」）が設立された（当初病院関係者15施設16名で発足）⁶⁾。

医学図書NWの発足により、研修会の開催や情報交換の場が作られ、顔の見えるネットワークとして、困ったときの相談仲間、スキルアップの場として活用されている。この医学図書NWでは、新たな医学関係文献複写サービスを求める声があった。

また、長野県の卒後臨床研修⁷⁾は、信州大学医学部附属病院（以下「信大病院」）を核として、県内の地域中核病院と連携している。2年の研修期間のうち1年を信大病院で、残り1年を関連病院で研修を行っている。教員と同じサービスを図書館で受けることができるのは信大病院研修中だけであるため、関連病院でも信大病院研修時と同様のサービスを求める声があがっていた。

2007年度には、文献複写料金後納制度を実施し、これにより文献複写物の迅速な提供、支払処理の簡略化、書留料金および領収証書発行が不要となった。その結果、2007年度は、非相殺館⁸⁾から医学部図書館への文献複写依頼数が従来の3倍程度と飛躍的に増加することとなった。2008

表3 非相殺館からの文献複写受付数

	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
前納	122	171	212	19	41	86	45	68
後納	—	—	—	555	1,378	2,251	2,398	1,848
計	122	171	212	574	1,419	2,337	2,443	1,916

※2011年度：4月～12月

年度は、医学関係文献複写サービスを開始したこともあり、さらに件数が伸びていることは、複写料金の前納制は依頼館にとって大変な負担であったと考えられる。

(2)長野県における JDream II コンソーシアム

2007年8月にJSTより信州大学に対しJDream II コンソーシアムの提案があった。当時のJDream II コンソーシアムはすでに高知大学が導入し⁹⁾、すべてのメンバー利用料を大学が負担する方法であったが、信州大学が同様な形式で導入することは困難であった。

後日、JSTより高知大学方式とまったく異なる新サービスとして、信州大学は正規の料金を負担し、関連病院は安価にて導入できる提案があった。この提案により、医学部図書館と関連病院がそれぞれJSTと安価に契約することができた。

通常、病院がJDream IIを導入する際の最低料金は、年間30万円（同時アクセス3）¹⁰⁾だが、今回のコンソーシアムの提案により、次の2通りでの安価な契約が可能となり、2008年度は13病院の参加となった。

- ・年間10万円（同時アクセス1）
- ・年間15万円（同時アクセス2）

(3) 医学関係文献複写サービス

医学関係文献複写サービスは、関連病院からの

Webによる文献複写を受け付けている。申し込みから文献提供までの流れは図2に示すとおりであり、医学部図書館に所蔵している資料は医学部図書館で複写して依頼病院に提供している。医学部図書館に未所蔵の資料は他の所蔵館に依頼・取り寄せ、依頼病院に提供するものである。これは、医学文献の少ない病院にとって、便利なサービスとなっている。業務量の推測が困難なこともあり、サービス対象機関は当面JDream II コンソーシアム参加病院のみである。

①文献複写の受付

複写依頼があると、医学部図書館の文献複写依頼担当は、所蔵確認を行う。医学部図書館に所蔵している場合は、図書館システムのローカル機能を用いる。医学部図書館に依頼を行い、文献複写受付担当が現物の複写作業等の処理を行う。医学部図書館所蔵の場合の1件あたりの請求料金は、1枚35円＋依頼病院までの送料である。

医学部図書館に所蔵がない場合は、図書館システムによる学外文献複写依頼機能により他館（所蔵館）より文献を入手する。この場合の請求料金は、他館から入手するために要した料金の、医学部図書館から依頼病院までの送料を加えたものである。手数料は請求していない。

資料送付にはヤマト運輸のクロネコメール便を利用している。25グラムを超過した際の郵送と比べて安価であるが、近隣でも先方には翌々日配

図2 文献複写サービス—申し込みから文献提供までの流れ

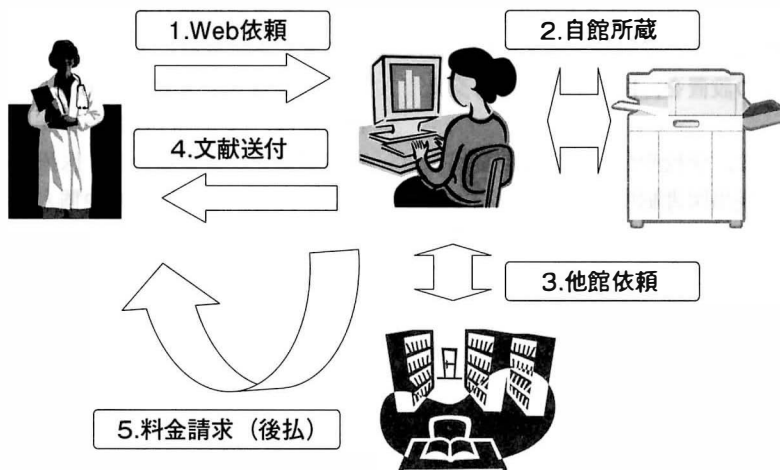


表4 文献複写処理件数(受付)

	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
文献複写 自館対応	268	833	841	577
文献複写 他館対応	258	542	641	560
計	526	1,375	1,482	1,137

※2011年度:4月~12月

達というデメリットもある。

②料金請求

料金請求は四半期ごとに後納で行う。依頼病院からの受付データ集計を行い、当該病院に請求書を発行している。

2008年6月より医学関係文献複写サービスを開始したところ、表4に示すとおり毎年着実に増加している。

3.2 附属病院患者図書室

信大病院患者図書室(愛称「こまくさ図書室」、以下「こまくさ図書室」)¹¹⁾は、2009年5月に信大病院新外来棟オープンに合わせて開室した。このこまくさ図書室は信大病院が管理運営しているが、松本市図書館の分館としての機能を有している大変ユニークな図書室である。

信大病院が新外来棟を建てるにあたり、病院長からの指示で、信大病院の患者相談窓口である医療福祉支援センターが中心となって、こまくさ図書室を作ることが決まった。患者が自ら病気のことを知ることができる学習の場としての活用と、入院患者の娯楽用読物の提供施設としての役割を兼ね備えた図書室の設置を、医学部図書館も交えて検討した。

松本市図書館には、学校や公民館に長期貸出を行っている「団体貸出図書制度」の図書(松本市図書館システムに登録されている)があり、これを娯楽用図書として充当することにした。病気や医療関係の図書は信大病院で用意するが、この図書は医学部図書館が購入登録している。附属図書館の図書館システムに登録し装備等を行っているため、一つの図書室で二つのシステムが動くことになる。信大病院で購入した図書のデータを松本

市図書館の図書館システムへ登録することで、こまくさ図書室のシステム一元化が図れ、松本市図書館と連携した運用体制を提案することができた。

2008年3月に附属病院長と松本市長との間で基本合意がされ、2009年3月には協定書を取り交わした。そのコンセプトは、信大病院が運営する市立図書館の分館並みの機能を持った病院患者図書室である。

松本市は、信大病院への委託事業として図書館の運営を依頼し、信大病院が図書室職員を常時雇用し配置した。松本市図書館用パソコンを導入し、貸出・返却および100万冊の蔵書のリクエストなどに対応している。なお、リクエストされた図書は、週2回の、市からの巡回便で配送している。

利用は病院の患者限定ではなく、市民も利用可能である。松本市図書館の利用者証を発行するが、例外的に大学病院の患者向けに半年間利用できる利用者証も発行している。開館時間は9時~16時で信大病院が開院している日のみの開館となる。土日祝日は閉館している。

蔵書は、松本市図書館からの団体貸出図書3,500冊(長期貸出)を定期的に循環させている。信大病院は、図書2,000冊を医学部図書館で購入し装備して、そのデータを附属図書館システムと松本市図書館システムの両方に登録している。こまくさ図書室に来室した市民は信大病院購入の図書も貸出が受けられ、松本市図書館のどこからでも返却可能である。

こまくさ図書室に来室した利用者が、病院で用意した図書などでは満足しない場合、「①専門書希望者は、医学部図書館を紹介。②相談希望者が専門知識が必要な場合は、医療福祉支援センター職員が対応。③専門的かつ個人的な相談は、医療福祉支援センターが対応。」といった案内を行った結果、病気や医療について知りたい利用者に、正確で的確な回答やアドバイスができるようになった。

4 学術的連携（研究成果の発信）

(1) 地域リポジトリ（信州共同リポジトリ）

機関リポジトリについて、長野県下の高等教育機関では次の3点の問題があった。①単科大学もしくは短期大学と小規模な大学が多く、単独での機関リポジトリの構築が困難。②県内の大学からは大学紀要等を機関リポジトリから発信したいと要望する声がなかった。③信州大学の機関リポジトリに組み入れることの負担が大きく困難。

しかし、国立情報学研究所（以下「NII」）の最先端学術情報基盤整備委託事業（以下「CSI」）の外部資金の獲得、NIIが開発している共用リポジトリを活用することが可能になったため、NIIの開発したクラウド用 WEKO をリポジトリシステムとして使用することとして検討を進めた。長野県下の大学に打診した結果、一部の大学で合意が得られることもあり、地域共同リポジトリを2010年に立ち上げた。共同リポジトリの主な活動は、2010年は組織作りのための広報、研修会、2011年は共同リポジトリで公開する研究成果の収集、システム講習会であった。2012年度中にWEKO本稼働による各大学からの公開を予定している。現在長野県下の高等教育機関は、2011年12月に12校が参加に至っている¹²⁾。

このWEKOは構築の費用、労力、技術力、専門知識が不要で、小規模校が新規参入しやすく、各校独自にカスタマイズできるトップページが特徴である。各校でのシステムメンテナンスの必要がなく、システムの専門職員を必要としないことから、ハードルが低かったことが各校の参加につながったものと考えられる。また、参加各校の合議制により、地域リポジトリの名称、運営要項を共同作業により決定した。CSIの外部資金とNIIのリポジトリシステムにより予算措置ができたことも大きかった。信州共同リポジトリに参加した大学からは、「リポジトリ運営ノウハウを共有できた」「教育・研究の公開が簡単にできる」「地方大学単独でのリポジトリ構築は財政的に困難であったが、共同リポジトリで負担が軽減した」などの声が寄せられている。

(2) 遺跡資料リポジトリ（長野県遺跡リポジトリ）

遺跡の発掘調査報告書は発行部数が少なく、入手が難しい学術資料の一つである。「全国遺跡資料リポジトリ・プロジェクト」は、NIIのCSI事業として島根大学を中心に取り組んでいるもので、遺跡の発掘調査報告書（以下「報告書」という）をデジタル化し、遺跡資料リポジトリシステムを通して、公開・発信している。現在は20府県域の報告書が公開されている。

長野県は全国でも有数の遺跡があり、報告書も多く発行されていたことから、地域へのメリットも大きく、附属図書館は2010年度からこのプロジェクトに参加し、県内の遺跡に関する報告書をデジタル化している。これらの報告書は、発掘を行った各市町村が保有しているものを譲り受け、デジタル化したもので、信州大学が連携協定を結んでいる市町村を核にして収集した。

2011年8月現在1,640件の報告書を「長野県遺跡資料リポジトリ」¹³⁾として公開し、全国一の数である。2011年度末には2,100件の公開となる。遺跡資料リポジトリも、CSIの外部資金とNIIのリポジトリシステムにより予算措置ができたことが大きかった。

5 文化的連携

(1) アメリカンシェルフプロジェクト

アメリカ領事館内にあるアメリカンセンターが、担当各地の図書館・公共施設に本棚（シェルフ）を用意し、日本では入手しにくいアメリカの本を寄贈し、本を通じた文化交流を図るアメリカ国務省のプロジェクトである。アメリカの歴史・文化・価値観への理解を図るため、文化イベントや英語での読み聞かせなどのイベントを共催し、地域とアメリカとの交流を深めアメリカを学ぶ機会を提供することが目的であった。

附属図書館では、国際協力について探っていたが、地域にも貢献できることから、2010年に長野県の拠点図書館として名古屋アメリカンセンターと協定を結んだ。日本で入手困難な合衆国行政機関の名簿、留学生関係、ピューリッツァー賞関連本などの寄贈を受けることで、信州大学とし

ての地域貢献を進めることができたと考える。

なお、2011年6月にはアメリカ大使館公使の講演会、同年11月にはフルブライト財団によるアメリカ留学説明会を開催し、多くの市民・学生との交流の場を提供できたのは大きかった。

(2) 美術館・博物館

附属図書館には、2002年度に小谷隆一氏より寄贈された国内では有数の山岳関係の登山と山に関する貴重な国内外資料約8,000冊の「小谷コレクション」がある。このコレクションは県内の博物館等での企画展示に利用されている¹⁴⁾。

附属図書館は旧制松本高等学校時代に入手した1920年代の絵画を所蔵している。2009年には松本市美術館で「よみがえる名画—旧制松本高等学校の遺産」の絵画展を開催、2012年には、4月～5月にかけて安曇野市豊科近代美術館での展示会を予定するなど、附属図書館が持つコレクションを市民に公開することも地域連携の一つのあり方である。

6 おわりに

今回の大学図書館の地域連携では、図書館間連携の他に、医学の専門領域や学術・文化的連携といった多様な活動の意義を考えることができた。

今後、長野県内における図書館での地域連携を拡大するには、次の課題があると考えている。

- (1) 信州大学は県内5キャンパスに図書館がある。現在附属図書館と農学部図書館で行っている市立図書館との連携を、すべての図書館で行うことで分散キャンパスのメリットを最大限に生かしていきたいと考える。
- (2) 附属図書館のある松本キャンパスから40kmほど離れたところには、大町市立図書館があり連携を2012年度に計画している。大町市には市立山岳博物館を有し、登山関係者から寄贈された多くの図書や資料を保有されている。電子目録化する予定であることから附属図書館で持つ「小谷コレクション」と連携して、山岳関係の調査研究図書館としての発展を考えていきたい。

- (3) JDream II コンソーシアムの発足後は、病院の参加と脱退があり、2011年度の参加病院は18病院と微増に留まっている。新規参加を多くの病院へ依頼してもJDream IIが周知されておらず、医学中央雑誌（医中誌 Web）やPubMedさえあれば十分という考えなど、病院独自の考えがあり、十分なメリットを感じてもらえていない。

また、このコンソーシアム方式を長野地域以外で広く広報¹⁵⁾したが、その後コンソーシアムが広がらない。大学図書館の負担が大きいのかなのか。病院への広報不足なのかな、他県での動きがないのは残念である。

- (4) 医学関係文献複写サービスは、専任の職員が配置されていない病院図書室が多いこともあり、歓迎されている。医学部図書館では、病院図書室だけでなく、個人開業医向けに医師会との連携や、地域の薬剤師会、看護師会などとも連携できないか考えている。
- (5) 遺跡資料リポジトリは、いまだ公開の許諾を得られなくて報告書が入手できない自治体もある。そのような自治体への広報を引き続き行い、全県を網羅したいと考えている。また、新しく発行する報告書については、各自治体からPDFファイルの提供を受けるなどによるコストの削減を図りたい。

<注>

- 1) 信州大学の理念目標
<http://www.shinshu-u.ac.jp/guidance/philosophy/mission.html>
- 2) 「全国大学の地域貢献度ランキング（上）」『日経グローバル』No.184, 2011. p.10-25
- 3) 信州大学附属図書館の理念目標
<http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/aim.html>
- 4) 大学図書館と公共図書館との地域連携
<https://soar-ir.shinshu-u.ac.jp/dspace/bitstream/10091/11111/3/NaganoLA2010.pdf>
- 5) 講演の内容が一般向けであったので、塩尻市と連携して開催した。アメリカンシェルフプロジェクトは5(1)参照
<http://japanese.nagoya.usconsulate.gov/www/hnj-americanshelf.html>
- 6) 前澤好広「長野県でのネットワーク活動について」『病院図書館』Vol.26, No.2, 2006, p.54-55
- 7) 信州大学附属病院の卒後臨床研修

- <http://www.hp.md.shinshu-u.ac.jp/sotsugorinsho/>
- 8) NACSIS-ILL とは、図書館間で行われている相互貸借サービス（文献複写・資料現物の貸借の依頼及び受付）電子化したシステム。四半期毎に料金の精算をする「相殺館」と、その都度精算する「非相殺館」がある。
- 9) 田所千峰子「臨床研修協力病院とのデータベース共同利用：高知大学総合情報センター（図書館）医学部分館の例」『医学図書館』Vol.54, No.1, 2007, p.69-72
- 10) JDream II 病院料金
<http://prjst.go.jp/pricelist/jdream2-3.html>
- 11) こまき図書室
<http://www.hp.md.shinshu-u.ac.jp/KomakusaLibrary/index.html>
- 12) 信州共同リポジトリ
<https://soar-ir.shinshu-u.ac.jp/dspace/bitstream/10091/13194/1/%EF%BC%B0%EF%BC%B0%EF%BC%B42.pdf>
- 13) 長野県遺跡資料リポジトリ
<http://rar.nagano.nii.ac.jp/>
- 14) 小谷コレクションのうち、近世（主に江戸時代）の和古書・古地図については、全文を電子化して公開している。
<http://moaej.shinshu-u.ac.jp/>
- 15) 石坂憲司、折井匡「信州大学附属図書館医学部図書館の地域関連病院への新サービスの取り組み」『医学図書館』Vol.56, No.2, 2009, p.151-155

(2012.1.31 受理)